

歌書の変遷

——江戸前期を中心に——

江戸期を通じて、歌書はいつたいどれくらい刊行されたのであろうか。

歌書の刊本は従来、往々にして「流布本」のひと言で片付けられ、必ずしも十全とは言いがたい本文の質が問題にされてきたけれども、いま改めて王朝文学の受容や近世文学万般の展開を考える時、それらが果たした役割は極めて甚大であったと認めねばなるまい。「古今和歌集」¹や「百人一首」²などのように、それぞれの作品ごとの報告は徐々に蓄積されてきてはいるものの、歌書刊本の全容を捕捉してその特徴と傾向、さらには展開と消長を論じたものとなると見当たらないのが現状だ。

そこで本稿では、あれこれの細部には目をつぶり、思い切って江戸期全般を視野に入れて歌書刊本の変遷を描き出してみたい（ただし、紙幅の都合により、ひとまず対象を江戸前期に絞る）。調査は現在も続行中であり、未見の書物がなお少なくないことも自覚しているので、調査途上での概要報告としておつき合いただきたい³。

神作研一

一、前提

まずは用語の定義から。

本稿で用いる「歌書」とは、和歌関係書、すなわち撰集や家集、定数歌、歌合、歌会和歌、歌論歌学書は当然のこと、その範囲を大まかに捉えて、適宜、紀行・随筆・物語・注釈・詩書・絵本などの類をも含んだ総称とする。拠りどころは、江戸時代にしばしば刊行された書籍目録の（分類）で（寛文六年頃刊『和漢書籍目録』の「歌書」部参照）、古典受容の具体相と近世文学の基層を探る上では、当代の目線に立つてこのように緩やかに捉えた方がかえって有効だと考えるゆえである⁴。

因みに、「歌書」ということばの成立は、鎌倉中期との指摘があるが、実際の用例としては、今のところ「兼職雑談」（永正七年（一五一〇）頃成）あたりまでしか遡れない⁵。あるいは「歌道」ということばもまた同じように、それほど早くまで遡れないことを思い合わせる時、私たちがふだん何となく使っている「ことば」への概念規定とその歴史性の検討を蔑ろにす

ることは許されまい。その意味で、「歌書」はともかくとして「歌道」や「歌学」の語が、近世になって刊本の「外題」に頻繁に登場してくる事実も非常に興味深いものだ。

さてこれから歌書刊本を取り上げるにあたって、不可避でありながらも本稿ではあえて言及しないことどもを四点、挙げておく。

一つめは写本に関わる問題。歌書にとつて最も上質な本は何か、ということ考えた時（というよりも考えるまでもなく）、それはやはり写本（刊本に対する写本の意で、自筆本も含む）に尽きよう。本シンポジウムにおける久保木秀夫氏の発表「禁裏・近衛家の藏書形成過程一端」（本誌所収）は、まさにその時代の最上本に関わるものであるが、他方、例えば賀茂真淵の『冠辞考』（宝暦七年（一七五七）刊）のように、歌書の刊本の中には、刊本でありながらわざわざ綴子表紙をつけ大和綴じにする、いわば写本風に造った特装本がまま見出されるという事実がある。この種の写本偽装——刊本における（写本へのあこがれ）——が、江戸時代を通じてしかと存在していた点も見逃し難い。

近世文学の最たる特徴が出版の時代の文芸であることは文学史の定説だが、しかし近年の最新の動向は、かつての近世刊本主義への反省を促すものが多く、もっぱら江戸時代における写本の（復権）（刊本の位置づけに対する認識の変容）とも言うべきものが目に付くように感じられる。ことに話が和歌、歌書に関わる場合、書物世界における（身分）の問題とも絡み合つて、問題はいつそう複雑にならう。

二つめは本文の問題。前述の通り、和歌や王朝文学の研究において、刊

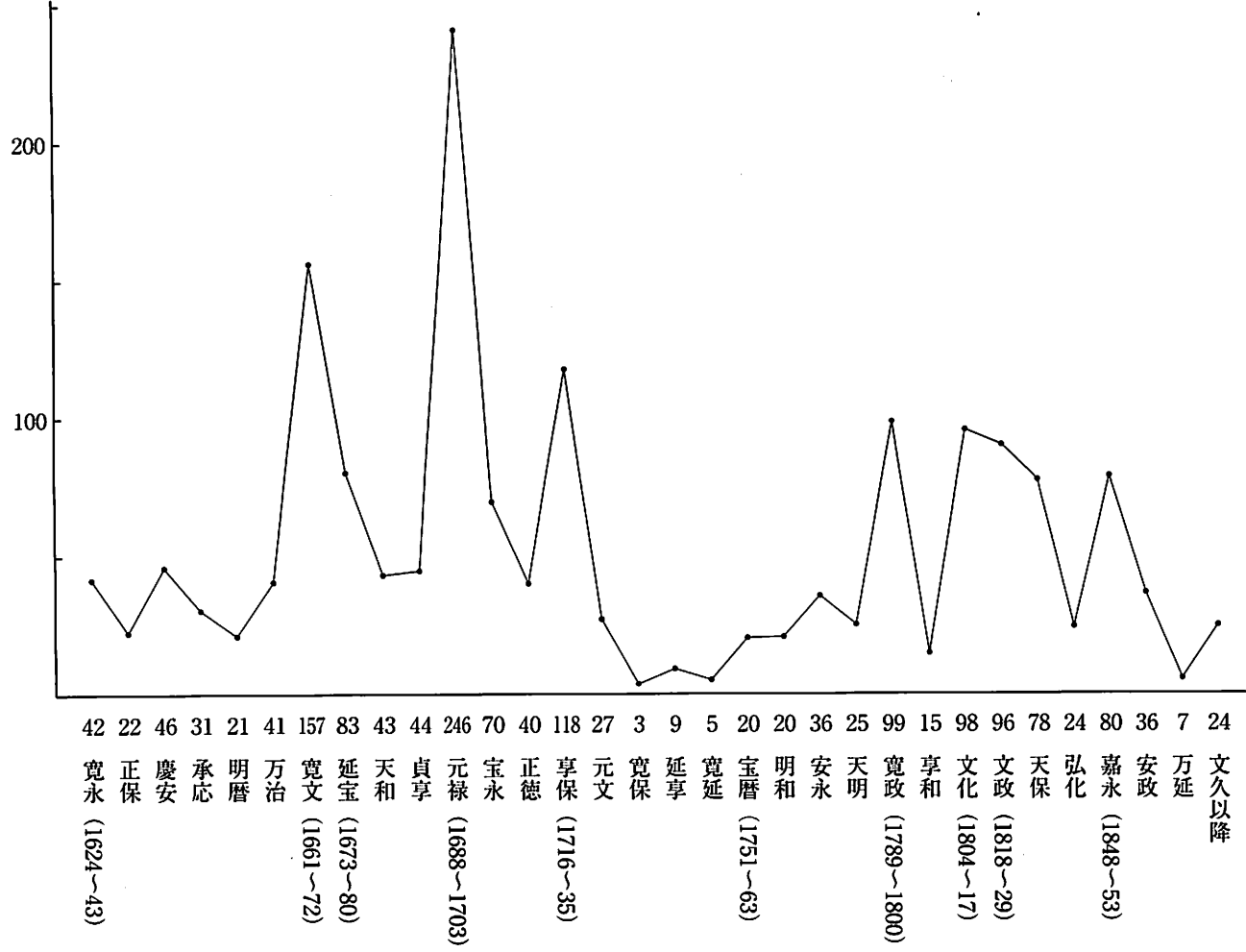
本は流布本として、常にその本文の質が問題にされてきた。その事実を引き受けねばならないが、一つひとつの検証は本稿のめざすところではない。三つめは古活字版。近世初期の文化史的状况を見据えた時、古活字版による（古典の開放）は極めて重要な問題を抱えているが、「流布」という観点を重視するために目をつぶる。近世後期の木活字版についても同断で、本稿では整版のみを対象とする。

四つめは無刊記本の問題。これは、歌書の「年表」を編む際に便宜上問題になると言うのみならず、近世初期の、特に寛永版を扱う場合には避けられない問題だが、本稿では原則として踏み込まない。

如上、いささか乱暴な方針ではあるが、あくまでも歌書を（モノ）として眺めることで、近世の文学史ひいては文化史を考える礎としたい。

二、全 容

次頁のグラフは、寛永から幕末に至る歌書刊本の点数をグラフ化したものの。元号の上部に記した算用数字は刊行点数で、総計で一七〇〇点余り（同じ板本を使って印刷した後印・後修本であっても刊年が異なるものはその都度カウントした）。ただし、歌書の定義自体が既に揺れを含んでいる上に、江戸中期以降爆発的に増えてくる往来物の類はいくつかを採りながらも多くを捨て、逆に、中期以降徐々に増えてくるテニラハ論著の類は努めて拾い、絵本や狂歌書などはその都度判断した上で取捨したので、この数値は変動の余地を多分に含んでいる。あくまでもひとつの目安として受け止められたい。



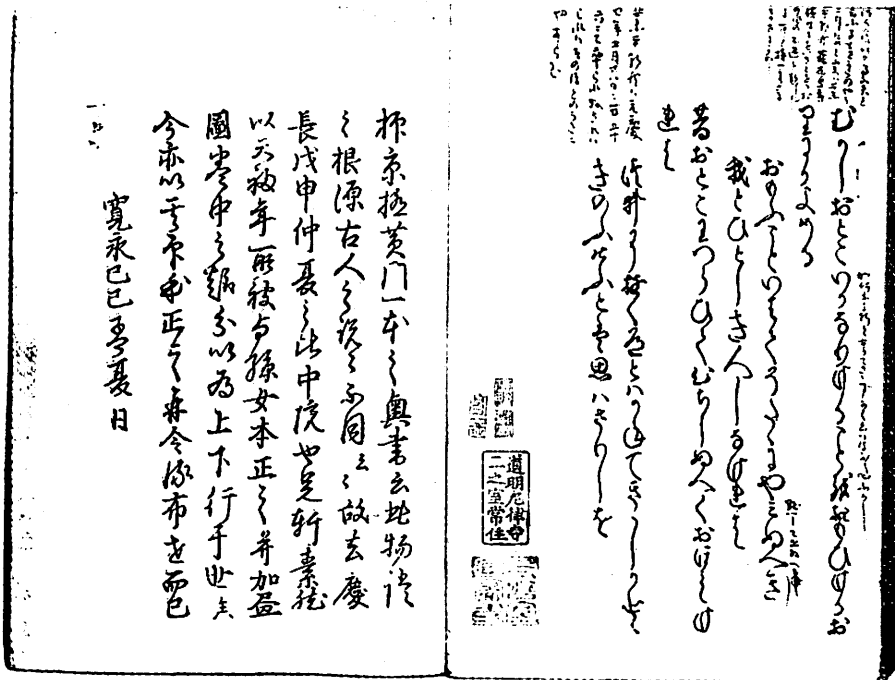


図1 寛永6年刊「伊勢物語」(絵なし本) 卷末・刊記 (今西祐一郎氏蔵)

江戸前期 (寛永〜元禄) 七七六點
 中期 (宝永〜天明) 三三三點
 後期 (寛政〜安政) 五五七點

それでも、この折れ線グラフからはさまざまのことが思われてくる。

刊行点数としては元禄期が突出していること、寛文・延宝頃にも寛文・延宝期の充実が見てとれること、逆に享保期は、その長さに比べれば点数が非常に多いことまでは言えないこと、享保以降天明頃までの江戸中期がやや低調であること、さらに実学尊重の吉宗の時代性や、在位する天皇・院との関係性、あるいは国学の隆盛、本屋仲間の問題等々も考慮したくなるけれども、これ以上の軽々なる指摘は差し控えよう。

ところで、江戸時代を通して最も頻繁に(安定的に)刊行されたのは「伊勢物語」である。寛永六年の刊本(刊記「寛永己巳孟夏日」、大二冊、絵入本と絵なし本の両方あり)(図1)を筆頭に、注釈なども含めれば総計で二〇種余りにも及ぶ。ほぼ二年に一回のペースで刊行された、江戸時代のベストセラーだ。他に上位を占めるのは、「古今和歌集」「百人一首」「徒然草」「和漢朗詠集」であり、一方、「源氏物語」など長大な作品はやはり敬遠された。読書や享受、あるいは出版のコストなどを考えれば妥当な結果であろう。

では以下に、江戸前期の諸状況を、A寛永期／B基本文献／C装訂／D書型の各項目ごとに尋ねてみよう。

春

五春

逐吹清圃不待芳菲之候迎春后

宴将希雨露之恩

池凍東頭風度解窓梅の面雪封寒

うれいらあうういふううむいふう

和漢朗詠集下
昔月後は流波意頻と属と常連
霜鶴波流可事唯垣年婦漸皓
とくくくくくくくくくくくくくく
ゆきわくくくくくくくくくくくく

寛永五年次戊辰孟春開板与

図2 寛永5年刊『和漢朗詠集』巻首・刊記（個人蔵）

三、江戸前期——その特質と展開——

A 寛永期

歌書として最初の出版物は、寛永五年刊の『和漢朗詠集』（刊記「寛永五年次戊辰孟春開板焉」、大2冊（図2）。版元は記されないが、京都版と見て間違いない。寛永期の刊行書目のうち、他に主要なものを挙げてみれば次の通り（非刊行順）。

- 「古今和歌集兩度聞書」
 - 「万葉集」
 - 「百人一首」「百人一首抄」「鷹三百首」「自讃歌注」
 - 「題林愚抄」「類字名所和歌集」「和漢朗詠集私註」「新撰朗詠集」
 - 「八雲御抄」「三部抄之抄」「竹園抄」「桐火桶」「愚問賢注」「歌林良材集」
 - 「闕疑抄」「真名伊勢物語」
 - 「徒然草」
 - 「土佐日記」
- どれも良く知られた歌書で、それまで写本として流布してきた種々の歌書が、寛永期を迎えて広く一般に開放されていったさまが窺知できよう。古活字版との関係（寛永八年刊『類字名所和歌集』は古活字版第二種本の覆刻）や、初期の版元としていろいろと問題の多い版元（杉田良庵玄与・杉田勘兵衛尉など）も名を連ねるがそれらは措き、今は一点だけを取り上げてみたい。

うなひ松の歌合
 寛永十八年刊の「仙洞歌合」(刊記「寛永十八年巳陽月吉辰」)
 町風月宗智(大二冊)は、後水尾院歌壇における記念碑的な歌合(三条西
 実条判)で、寛永一六年一〇月五日の開催からわずか二年後に刊行された
 もの。寛永期有刊年本のうち唯一の当代作品の出版物であり、何より、宮
 廷和歌の催しが刊本化された江戸期で唯一の事例として注目すべきもの
 だ。そもそも、江戸初期の刊行にかかる歌書は大半が古典であって、当代
 作品は極めて少ないのが特徴である。この「仙洞歌合」に続く、当代作品
 の早期刊行物を順に拾ってゆけば次の如し。
 ○正保三年刊「うなひ松」(刊記「正保参年九月中旬刊」、半一冊)
 (図3)
 ○正保四年刊「山家記」
 (刊記「二条通玉や町村上平楽寺開板」正保四年丁亥正月吉祥日、
 大一冊)(図4)

二條通玉や町村上平楽寺開板
 正保四年丁亥正月吉祥日
 山家記
 寛永十八年刊の「仙洞歌合」(刊記「寛永十八年巳陽月吉辰」)
 町風月宗智(大二冊)は、後水尾院歌壇における記念碑的な歌合(三条西
 実条判)で、寛永一六年一〇月五日の開催からわずか二年後に刊行された
 もの。寛永期有刊年本のうち唯一の当代作品の出版物であり、何より、宮
 廷和歌の催しが刊本化された江戸期で唯一の事例として注目すべきもの
 だ。そもそも、江戸初期の刊行にかかる歌書は大半が古典であって、当代
 作品は極めて少ないのが特徴である。この「仙洞歌合」に続く、当代作品
 の早期刊行物を順に拾ってゆけば次の如し。
 ○正保三年刊「うなひ松」(刊記「正保参年九月中旬刊」、半一冊)
 (図3)
 ○正保四年刊「山家記」
 (刊記「二条通玉や町村上平楽寺開板」正保四年丁亥正月吉祥日、
 大一冊)(図4)

図4 正保4年刊「山家記」刊記(個人蔵)

図3 正保3年刊「うなひ松」刊記(個人蔵)

私たちはここに初めて、青木宗胡著の「鉄槌」を除く三点が、いずれも
 木下長嘯子関連の書物であることに気付かされる。長嘯子の存在は、その
 異風の詠みぶりも秀逸なる和文も、まさに時代を抜き出たものと見るべ
 きだが、自作の出版という営為においても先駆的であったことが確認でき
 て、非常に興味深い。



図5 元禄4年刊「鳴の羽搔」巻中・刊記（個人蔵）

B 基本文献

次に、寛永から元禄にかけて刊行された基本文献の、それも部類書・集成書の類を辿ってみよう。「基本文献」なる言い方が既に相当曖昧だが、以下の掲出書目をもって、意とするところを看取されたい。

(ア) 撰集（勅／私）

まず勅撰集には、正保四年刊の『二十一代集』（刊記「正保四丁亥曆三月中旬開板／中御門通弱檜木町吉田四郎右衛門尉（印）」、大五六冊）と、明暦元年刊の『八代集』（刊記「明暦元年初秋吉辰／寺町本能寺前八尾勘兵衛板」、大一六冊）があり、私撰集には寛永二〇年刊の『万葉集』（刊記「寛永式拾年癸未臘月吉日／洛陽三条寺町誓願寺前安田十兵衛新刊」、大二〇冊）がある。それぞれ後印本も多く、文字通りの流布本だ。これに、院政期から室町末期までの和歌を集成網羅した『類題和歌集』（元禄一六年刊、刊記「京都三条通舁屋町／御書物所出雲寺和泉掾」、半三二冊）を加えれば、古典和歌の大半をおさえることができる。

利便性ならば、『内裏名所百首』等一四種の百首歌を集成した元禄一三年刊の『百首部類』（刊記「元禄十三庚辰歲孟春／出雲寺和泉掾藏板」、半六二冊）も挙げねばならないし、『三体和歌』等三九種の名数和歌を収めた元禄四年刊の『鳴の羽搔』（刊記「元禄四年辛未正月吉辰／書肆／吉田三郎兵衛／伊藤平八」、半三冊）（図5）にも注意したい。編者のみならず絵師もまた未詳だが、元禄期を迎えてこのような書物が刊行されるあたりに、ある種の〈成熟〉を読み取ることができよう。

寛永十五年戊寅年仲秋吉辰
二條觀音町凡月宗智刊行

寛永十五年戊寅年仲秋吉辰
二條觀音町凡月宗智刊行

之重祿太安之謬誤、一從舊本而
已、是共之所不加一私于其間也
同、名和詩古語深秘抄、壽于梓云

元禄十五年
孟春日

出雲寺和承傳授

図7 元禄15年刊「和歌古語深秘抄」刊記（個人蔵）

図6 寛永15年刊「三部抄之抄」刊記（個人蔵）

(イ) 家集

頌阿や西行、あるいは「雪玉集」「柏玉集」「碧玉集」のような単発の家集ももちろん刊行されたが、ここには、正保四年刊の「歌仙家集」（刊記「正保四丁亥曆八月／書林 中野道也繙梓」、大・一五冊）と、無刊記ながら慶安頃の刊行と目される「六家集」（刊記「京風月庄左衛門」、大・三〇冊、「秋篠月清集」「長秋詠藻」「山家集」「拾玉集」「拾遺愚草」「壬三集」を収載）とを挙げておく。

(ウ) 歌合

貞享二年刊の「歌合部類」（刊記「貞享二年龍集乙丑八月日／洛陽書林／二口伊予／西村九良右衛門」、大・三七冊）は、「天徳四年内裏歌合」から「永禄六年秋十五番歌合」に至る三六種を登載したものの、主要な歌合を収めた重宝な書物である。因みに本書は、延宝二年までには刊行されていたらしく、「貞享二年」の刊記を持たない無刊記本こそが原刊本ではなかったかとの新見が提出されている¹⁵⁾。

(エ) 歌論・歌学

いち早く寛永一五年に「三部抄之抄」（刊記「寛永十五戊寅年仲秋吉辰／二条観音町凡月宗智刊行」、大・五冊、「詠歌大概抄」「秀歌之躰大略」「百人一首抄」「未来記」「雨中吟」を収載）（図6）が刊行されたのは、三部抄伝授との関係からかと推測される。江戸期に入って御所伝授の一つとして行われた三部抄伝授は、その後江戸後期に至るまで、歌道伝授の階梯として

持つ私たちには無用の長物だが、当代には至便であったに違いなく、例えば元禄期には相応に活用された痕跡も確認される。¹⁷⁾看過できぬ一書と見るべきだ。

(カ) 紀行

宮川道達によって編集された『詞林意行集』は、元禄三年の刊行（刊記「元禄三年庚午初春涓吉／書林／錢屋七郎兵衛／山形三郎右衛門梓行」、半八冊）で、『宗祇終焉記』（宗長）等三三編の紀行文を収める。元禄六年刊の続編『拾遺意行集』（刊記「癸酉十一月吉旦／永原屋孫兵衛刊行」、大二冊）とともに、その果たした役割は大きい。

(キ) 和文

徳川光圀編、元禄六年刊の『扶桑拾葉集』（大三五冊）は、平安から江戸初期に至る三三三種もの和文を収載した一大叢書。元禄二年、幸仁親王序。長嘯子の和文を多く載せる（三五種）ほか、烏丸光広・冷泉為景の作品も多い。個別の和文の価値もさることながら、総体として、江戸人の表現の基盤を下支えした功績を見逃してはならない。

こうしてみると、『和歌古語深秘抄』『詞林意行集』『扶桑拾葉集』等々、主に元禄期に集成書の類が多く刊行されていることに気付かされる。前代までの断続的な歌書の刊行が（知）の基盤を整備し、それを承けての営為と見れば、元禄期は（歌書集成書の時代）とも見ることが許されようか。

C 装訂

言うまでもなく歌書刊本の大半は袋綴だが、ごくごく稀にそれ以外の装訂を持つものがある。卷子本と折本の事例を紹介しよう。

松花堂昭乗筆、慶安二年刊の『和漢朗詠集』（刊記「慶安二龍輯丙丑歲孟春如意珠日（朱印）（朱印）」）（図9）は、紙高三三・〇厘、七六紙を継いだ卷子本。『和漢朗詠集』の刊本としても、ひいては歌書刊本としても唯一の卷子本だ。実は本書には、同じ刊記を有する大本二巻二冊本があり、そちらは覆刻と思しい。原刊本は卷子・冊子ともに稀覯ながら、冊子本にはまあと印本が見受けられるから、卷子は最初に調製された特装版で、ほどなく冊子が並装版としてかぶせ彫りで作られたのではなかったか。卷子本は刊本ではあるけれども、特定の誰かに向けて作られた可能性もあり、その意味では多分に写本的な性質を身にとっているとも言えよう。¹⁸⁾そこには、歌書刊本初めての昭乗筆本という要因も絡んでいるか。

折本も珍しく、次の一点のみ。それは、元禄八年刊の『瀟湘八景』（刊記「元禄八乙亥歲仲春吉祥日／書林／華洛中川息障軒／浪花小嶋勘右衛門／同下山喜左衛門／繡梓、折特大一帖）で、長谷川等雲（伝未詳）の絵を具備した堂々たるもの。『瀟湘八景』の、しかも帯図本というあたりに折帖仕立ての因由が求められそうではあるが、明暦二年刊本など他の『瀟湘八景』刊本はみな袋綴（大本）。管見に及んだ国文学研究資料館蔵本（ハイド旧蔵）以外の伝本は知られないので、やはり本書も刊本ながら特製本であったか。

蒼海月色遙
 白浪沙餘集終
 新
 由

雄德山丘煙翁

松花堂主盟惺惺翁親遡洄
 空海大師筆道三十二傳之波瀾而高透
 過三級之禹門孰可攀金龍一鱗廢蠹測
 其餘流之徒以真筆為偽以偽筆為真一
 部朗詠漢字倭字翁之所筆刻以鏤梓本
 是驪龍領下之明珠後人奪而作自己家
 珍珍重書而為跋

慶安二龍輯已歲孟春如意珠日



圖9 慶安2年刊「和漢朗詠集」(卷子本)卷末·刊記(個人藏)

松花堂主盟惺惺翁親遡洄
 空海大師筆道三十二傳之波瀾而高透
 過三級之禹門孰可攀金龍一鱗廢蠹測
 其餘流之徒以真筆為偽以偽筆為真一
 部朗詠漢字倭字翁之所筆刻以鏤梓本
 是驪龍領下之明珠後人奪而作自己家
 珍珍重書而為跋

慶安二龍輯已歲孟春如意珠日

同年刊「和漢朗詠集」(冊子本)刊記(個人藏)

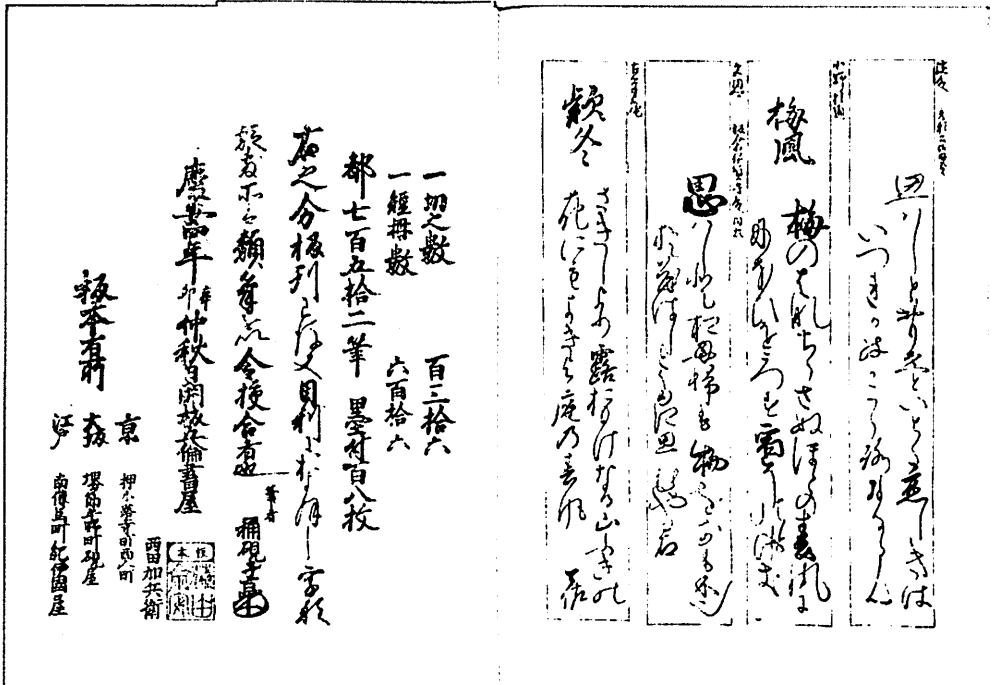


図10 慶安4年刊「御手鑑」巻末・刊記（個人蔵）

D 書型

元禄期まで下ればさすがに半紙本も増えてくるが、圧倒的に多いのはやはり大本である（因みに俳書は半紙本が一般的）。ここでは、枅型本、特大本、特小本、小本の四種を取り上げる。

（あ）枅型本

寛永から元禄までの七七六点もの歌書刊本の中に、枅型本は一点も存在しない。この事実は非常に興味深く、そして重要だ。そもそも、芭蕉が「おくのほそ道」（元禄版）を俳書としてはたいへんに珍しい枅型本に仕立てたのは、枅型の多い中世以前の歌書や物語書の写本に範を求めたからだと言えるが、こうして実際に、歌書刊本には（「ほそ道」以前に）枅型本がなかったとの事実が確認されることの意味は小さくない。他方、写本から刊本へという展開の中で枅型はなぜ消えたかとの問題も浮上しよう。

（い）特大本

特大本というのは、大本よりも大型の縦三〇糎×横二二糎以上の本を指す。大雑書などの実用書に多く見られる書型で、歌書や俳書には珍しい。俳書で一番大きなものは延宝四年序刊、西鶴編の「古今誹諧師手鑑」（縦四一×横二七・五糎）とされるが、歌書で最も大きいのは、その西鶴も做つたという慶安四年刊の「御手鑑」（図10）である。個人蔵の一本は、縦三九・四×横二九・〇糎。伝本が比較的多く、しかも版種も多岐にわたっており、なお今後の探索が必要な書物だ。元禄末までに、特大本はあと二つ。



図12 元禄9年刊「小町花あはせ」巻首（佐々木孝浩氏蔵）

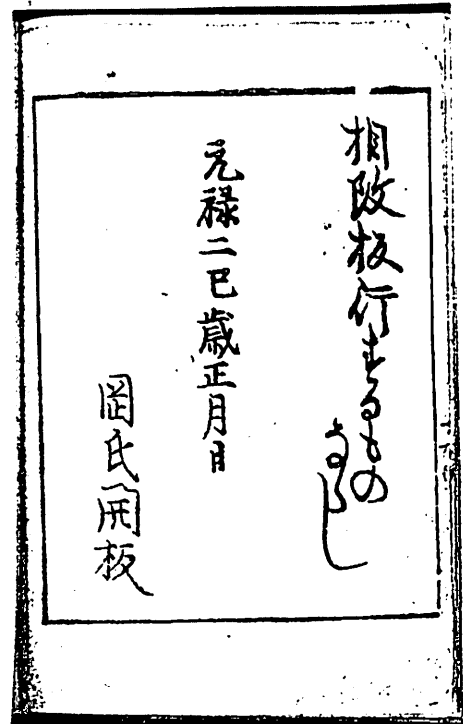


図11 元禄2年刊「女哥仙絵抄」刊記（金城学院大学図書館蔵）

建部伝内書、慶安元年刊の「和漢朗詠集」（刊記「慶安元年仲秋日」、二冊）と、元禄二年序刊の雛形「小倉山色紙模様」（刊記「日本橋万町本屋清兵衛」、二冊）である。

（う）特小本

特小本というのは小本よりも小さい書型の総称で、おおむね縦二三糎×横九糎以下の本を指す。実用的もしくは趣味的に作られたものが多く、例えば俳書で一番小さなものは、寛政七年刊、秋里籬島編の「俳翼」（縦七・二五×横五・四糎）とされる^②。歌書で最も小さいのは、カルタの付属品として製作されたと思しい、江戸後期刊の「百人一首」（サイズは区々だが縦七糎×横五糎弱のものが多い。絵入）であろう。江戸も中期を過ぎると、特小本がいろいろと出るようになるが——享保二年刊「徒然草」（刊記「享保二丁酉五月吉祥日／皇都書林寺町通五条上ル町梅村市兵衛版」、二冊、絵入）、同年跋刊「古今集」（二冊）、文政一〇年奥刊「三草集」ほか——、江戸前期にはまだ相当に珍しい書型であった。元禄末までにはわずかに三点、元禄二年刊「女哥仙絵抄」^②（刊記「元禄二巳歳正月日／岡氏開板」、一冊、絵入）。*柳沢昌紀氏蔵の無刊記後印本あり（図11）、元禄六年刊「徒然草」（刊記「元禄六癸酉年正月吉日／書林洛陽夷川車屋町甚右衛門板」、二冊、絵入、版下の富尾左兵衛は元禄俳人富尾似船の縁者か）、それに元禄九年年刊「小町花あはせ」（序中題、刊記「元禄九丙子歳／正月吉辰／中野小左衛門／木村五郎兵衛／葛林軒」、一冊、絵入（図12））である。

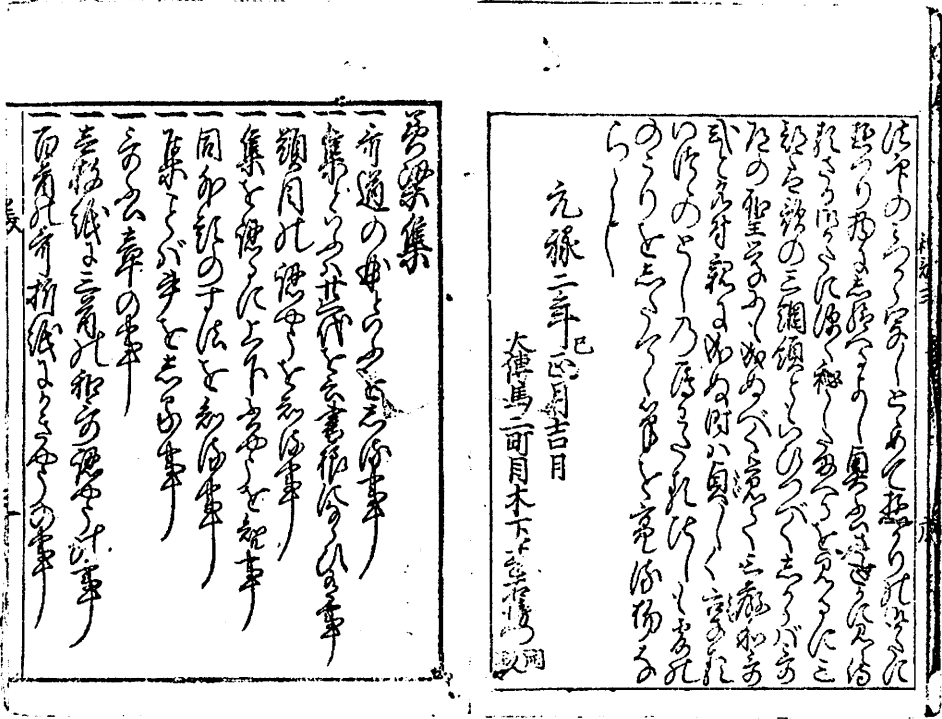


図13 元禄2年刊「三教和歌式」序 (佐々木孝浩氏蔵)

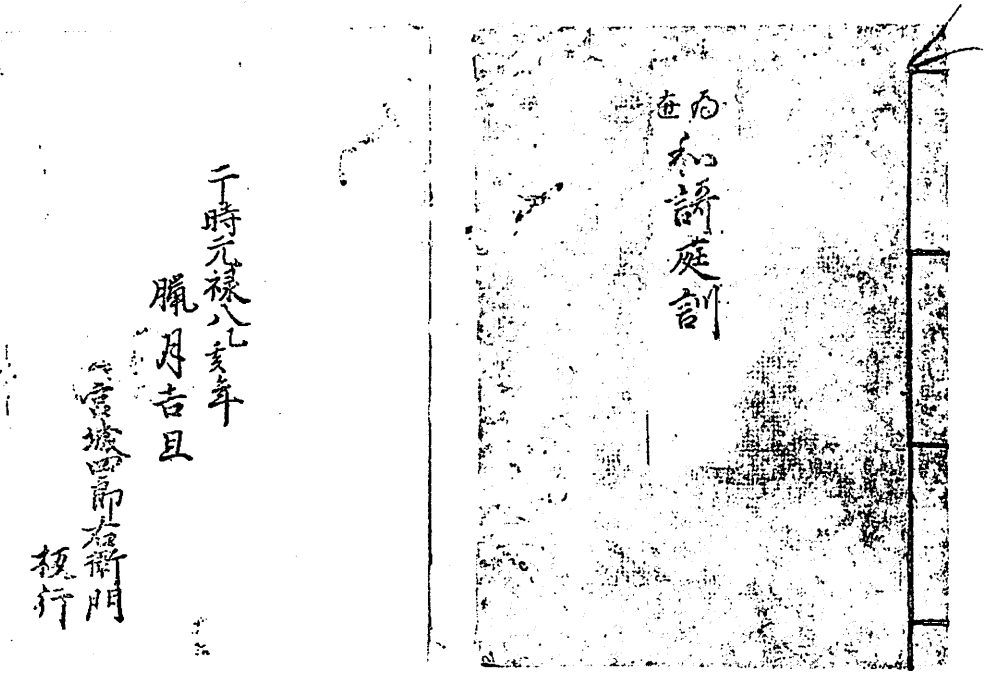


図14 元禄8年刊「和調庭訓」表紙・刊記 (佐々木孝浩氏蔵)

(え) 小本

小本は半紙本の約半分の大きさで、縦一四〇〜一六種×横一〇〇〜一一種程度。歌書と言えば大本が相場だが、さすがに時代が徐々に下つてくると小本が登場してくる。元号ごとに点数を示して代表書の一つ挙げよう。

承応 1 (絵入)

『伊勢物語』

寛文 5 (絵入2 / 江戸版1)

『伊勢物語』ほか

延宝 6 (絵入2 / 江戸版1)

『古今和歌集』ほか

天和 6 (絵入5 / 江戸版5)

『源三位頼政家集』ほか

元禄 17 (絵入8 / 江戸版4)

『若むらさき』ほか

小本に絵入が多いことや江戸版が目につくことにも注意したが、ことに元禄期以降、例えば『和歌極秘伝抄』(元禄一四年刊)、『続和歌極秘伝抄』(元禄一五年刊)などのような、いわゆる「暴露的刊行書」の類が現れてくることを見逃すべきではない(この傾向は宝永以降も続く)。この種のいかかわしい書物群が「小本」で刊行されることが多かったという事実も興味深く、本の〈身分〉ということを考えさせられる。

また、小本の歌書には、ままた本の稀なるものが見出される。天和四年刊『和歌初学抄』(刊記「天和四年子仲春上澣 / 青物町伊勢屋板」)、一冊、絵入)、元禄二年刊『三教和歌式』(刊記「元禄二年己正月吉日 / 大伝馬二町目木下甚右衛門〈開 / 板〉」、合一冊、師宣風絵入)(図13)、元禄八年刊『(為 / 世)和調庭訓』(刊記「于時元禄八乙亥年 / 臘月吉旦 / 宮城四郎右衛門 / 板行」、一冊)(図14)などである。

以上、江戸前期歌書刊本のそれぞれを、寛永期、基本文献、装訂、書型

という四つの観点から眺めてきた。だが、この外にも言及すべき問題は依然として多い。絵入本をめぐる問題²⁷、松会版をはじめとする江戸版の様相、歌書の版元(和歌所)の動向、(古典ではなく)当代歌書の出版状況などなど。あるいは外題史の問題——元禄期の歌書の外題(原題籤)には頓阿の名を掲げたものが目につくとか、西行や定家の人気が高いなどという事実も、時代思潮と併せ考えればたいへんに興味深いし、刊本をそのままに写したいわゆる「刊写本」²⁸をめぐる問題、場合によってはその営みや精神性を注視しなければならぬだろう。既述したように、刊本の「稀本」ということもあり得るのだから、刊行されたからと言って、それがそのまま流布に直結しないケースだって存在しよう。種々の問題はなお根深いところに底流していると見ねばならぬ。

個別の事例を挙げてゆくと際限がないが、例えば合点をそのまま付刻した延宝四年刊『撰五十番歌合』(定家・家隆詠、後鳥羽院点、半二冊)や、天和三年刊『二詠双点』(土御門院・良経詠、定家・家隆点、大一冊)などの刊本の背後には、江戸前期における添削、点取の隆盛も思い起こさるよう。

さらに、江戸中期以降への目配りということでは、双六の登場——(明和頃)刊『御伽 / 風流 百人一首歌双六』(淡彩、極大一舗)——や、初期の色版(多色摺歌書)の問題も重要だ。多色摺の登場は俳書よりも遅れるものの、安永四年刊の絵本『錦百人一首あづま織』(勝川春章画、大一冊)の彩色の美しさは見事というほかない。国学の隆盛に伴って増加してくる

熟蔵版の書物や私家版の歌書にも目を向ける必要がある。

想起される事柄、論すべき課題は多いけれども続稿を期し、ひとまず、右を以て本稿をたたむこととする。

注

(1) 川上新二郎「古今和歌集」版本諸版一覽(『斯道文庫論集』一八号、一九八二・三)、同「古今和歌集版本考―前稿の補訂をかねて」(同誌三四号、二〇〇〇・二)、同「古今和歌集版本考(続)」(同誌三五号、二〇〇一・二)、同「古今和歌集版本書影集」(同誌三六号、二〇〇二・二)。

(2) 湯澤賢之助編「近世出版百人一首書目集成」(新典社、一九九四)、吉海直人編「百人一首年表」(日本書誌学大系、青裳堂書店、一九九七)。

(3) 既に備わる二つの年表―上野洋三「近世歌書刊行年表―寛永―元文―」(『元禄和歌史の基礎構築』所収、岩波書店、二〇〇三)。
* 初出副題「寛永―寛文」
「女子大文学(国文篇)」四二号、一九九一・三」と、鈴木淳「近世後期歌書出版年表の作成」(『科研費研究成果報告書』一九九三)――を踏まえつつ、目下、江戸期を通しての「歌書刊行年表」の編纂を準備中である。以下の報告は、その手持ちのデータを適宜切り出したものとして受け止められたい。因みに、今もなお唯一の歌書の総合目録である「大日本歌書綜覧」(福井久蔵編、不二書房、一九二六)は、総計約八七〇〇点もの歌書を登載するが、刊本への目配りは当然のことながら浅く、それも「群書類従」本への言及が目立つ程度である。なお、成稿にあたっては、江戸期における俳書の全容を論じた雲英末雄「俳書―出版形態とその変遷―」(『日本書誌学大系』「俳書の話」所収、青裳堂書店、一九八九)。

初出、別冊太陽愛蔵版「俳句」(平凡社、一九八〇)、図説日本の古典「芭蕉蕪村」(集英社、一九七八)と、雲英末雄監修「カラー版 芭蕉、蕪村、一茶の世界」(美術出版社、二〇〇七)から多大の学恩を得たことを明記する。

(4) むろん、書籍目録の分類を絶対視するものではなく、その分類が、あくまでも版元による一つの判断のあらわれに過ぎないことも承知している。ただし、歌書概念をこのように緩やかに捕捉するのは何も書籍目録に限ったものではなく、江戸期に成立した写本による歌書目録類―岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「歌書目録」(江戸中期)写一冊・土肥経平旧蔵。久保木秀夫「中古中世散佚歌集研究」(青簡舎、二〇〇九)に翻印所収)、宮内庁書陵部蔵「歌書類目録」(寛政九年写一冊・柳原紀光編)ほか―にも共通する認識である。

(5) 「日本古典籍書誌学辞典」(岩波書店、一九九九)「歌書」の項(佐藤恒雄執筆)参照。

(6) 川平ひとし「歌学と歌道」(『中世和歌論』所収、笠間書院、二〇〇三)。

(7) 刊本の持つ「通俗性」の問題については、中野三敏・市古夏生・鈴木俊幸・高木元「座談会」江戸の出版(上)「板本」をめぐる諸問題」(『江戸文学』一五号、ペリカン社、一九九六・五)に詳しい。

(8) 今田洋三・中野三敏・宗政五十緒・尾形仂「座談会 近世の出版」(『文学』四九卷一―号、岩波書店、一九八一・一)、中野三敏「和本教室③和本には身分がある」(『図書』七二―号、岩波書店、二〇〇八・八)など。

(9) 今西祐一郎講演「絵がある／ない―版本「伊勢物語」の一問題―」(絵入り本国際集会公開講演会、於慶応義塾大学、二〇〇九・一〇)。近年、伊勢物語刊本に関する研究はかなり活発化しており、版種の分類については丸山愉佳子の二

- 編——「伊勢物語享受の実際——伊勢物語版本についての報告——」（学習院大学国語国文学会誌）四六号、二〇〇三・三、「伊勢物語の享受——近世版本を中心に——」（伊東祐子ほか編「平安文学研究生成」所収、笠間書院、二〇〇五）がある。また、国文学研究資料館に所蔵される伊勢の絵入刊本に関しては、藤島綾「国文学研究資料館蔵『伊勢物語』絵入板本和古書マイクロフィルム解題（一）」（本誌二九号、国文学研究資料館調査収集事業部、二〇〇九・三。*本誌に（二）を掲載）に、詳細な報告が備わる。
- (10) なお、岡雅彦・和田恭幸「近世初期版本刊記集影（一）」（本誌一七）二二号、国文学研究資料館文献資料部、一九九六〜二〇〇〇）、日本書誌学大系「寛永版書目并図版」（後藤憲二編、青裳堂書店、二〇〇三）参照。
- (11) 杉田良庵玄与と杉田勘兵衛尉は従来同書肆と見られていたが、実は別人であったとの新見がある。柳沢昌紀「寛永期の江戸の本屋・杉田勘兵衛尉」（書籍文化史）三号、二〇〇二・一）、同「近世前期の書肆・杉田勘兵衛尉をめぐる問題」（中京大学図書館学紀要）二四号、二〇〇三・五）参照。
- (12) 市古夏生「書物の出版」（『近世初期文学と出版文化』所収、若草書房、一九九八）。
- (13) 書中「前宝治御百首」の末尾に「前泉州司馬林時元板行 延宝第六年午三月日」どの刊記があることから、収録書の一部は元禄一三年よりも前に刊行されていたと思慮される。有吉保「百首部類」（『日本古典文学会々報』四八号、一九七七・三）参照。
- (14) 近時、行き届いた「解題」を付して影印が出た。川平ひとし「大伏春美編」影印本「鳴の羽搔」（新典社、二〇〇五）。
- (15) 佐々木孝浩「版本『歌合部類』の開版時期について」（『古典資料研究』一〇号、二〇〇四・一一）。
- (16) 樋口芳麻呂「和歌古語深秘抄」（『日本古典文学会々報』三八号、一九七六・五）。
- (17) 拙稿「難三長和歌」をめぐって——元禄地下二条派歌論の位相——（鈴木淳・柏木由夫編「和歌 解釈のパラダイム」所収、笠間書院、一九九八）。
- (18) 鈴木淳「江戸の卷子本」（『文学 隔月刊』一〇巻四号、岩波書店、二〇〇九・七）参照。
- (19) 注（三）前掲上野年表に、延宝三年奥刊の「百人一首」を「柝一冊」と載せるが、該書は大本である（西尾市岩瀬文庫蔵本は縦二八・〇×横一九・八釐）。
- (20) 注（三）前掲雲英論文。
- (21) 上野洋三「慶安刊本『御手鑑』について」（『館報 池田文庫』四号、（財）阪急学園池田文庫、一九九三・一〇）。
- (22) 注（三）前掲雲英論文。
- (23) 拙稿「図版解説 女歌仙絵抄」（『国文学研究資料館展示図録「江戸の歌仙絵 絵本にみる王朝美の変容と創意」』所収、国文学研究資料館編刊、二〇〇九）。
- (24) 拙稿「表紙図版解説『統和哥極秘伝抄』刊記」（『東海近世』一七号、東海近世文学会、二〇〇八・三）。
- (25) 上野洋三「有賀長伯の出版活動」（注（三）前掲「元禄和歌史の基礎構築」所収）。
- (26) 鶴見大学を会場とした和歌文学会大会時の「歌書のいろいろ」展（於鶴見大学 会館エントランスホール、二〇〇八年一〇月一八日・一九日）に展示され、「解

「題目録」には所蔵者である佐々木孝浩氏による「解題」が備わる。

(27) 絵入本のうち、歌仙絵に関しては拙稿「江戸の王朝美―歌仙絵入刊本の展開―」

(注(23) 前掲展示図録「江戸の歌仙絵 絵本にみる王朝美の変容と創意」所

収)にて江戸期全般の様相を取り上げた。

(28) 藤沢毅「刊写本について」(『鯉城往来』五号、二〇〇二・一一)。

(29) 拙稿「図版解説 錦百人一首あづま織」(注(23) 前掲展示図録所収)。

〔付記〕本稿は、国文学研究資料館での第四回調査研究シンポジウム「王朝文学の流

布と継承―国文学文献資料調査を起点として―」(二〇〇九年五月二一日(木))

における口頭発表「歌書の変遷」に基づく。席上および発表後にご教示下さっ

た飯倉洋一・井上敏幸・今西祐一郎・入口敦志・久保田啓一・武井協三の諸氏

ほかたくさんの方々に改めて衷心より御礼を申し上げますとともに、関係諸機

関・古書肆はもちろん、特に個人蔵本の閲覧でお世話になった今西祐一郎・

後藤憲二・佐々木孝浩・柳沢昌紀の諸氏にも深く感謝したい。

本稿は、国文学研究資料館基幹研究「王朝文学の流布と継承」(二〇〇六―

二〇一〇年度)の研究成果の一部であり、なお科研費・基盤研究(C)「江戸

時代中期における上方歌人の総合的調査・研究」(神作研一、課題番号195

20172)の研究成果をも反映している。